Shukugawa Gakuin College

（翻訳）エンツォ・カタルシ「19世紀イタリアの子ども」[1)]

早田　由美子

〈解　題〉

1960年代からアメリカ、イギリス、フランスを中心に深化した社会史研究は、今日その問題意識や対象、研究方法が広く共有されて市民権を得、歴史の発展に牽引的役割を果たしている。生、性、死にまつわる人々の日常行動を明らかにしながら、既存の歴史の枠組みの見直しを迫り、新たな解釈の糸口を示す社会史の成果に学ぶことで、今日の状況を知り、未来を展望する契機にすることが望まれる。

今回翻訳して紹介する、イタリアの教育社会史家のエンツォ・カタルシ（Enzo Catarsi）による論文は、社会史の発展によって掘り起こされることになった史料によって、19世紀におけるイタリアの子どもの様子を浮き彫りにしている。これらは、産業化の開始による共同体の崩壊、職住分離の進行など日常生活が大幅に変化する中、社会と家族が持っていた子どもを守るしくみや子育て機能が弱まって生じた混乱によってもたらされた事象であり、生活の困窮、女性に不利な規範、社会福祉や医療衛生の未成熟・未整備などもその背景にある。

その悲惨さや残虐さから、発表された当時は衝撃を持って読まれた内容が、今日、毎日のように繰り返される子ども受難の報道に慣れた私達にとって、それほど特殊ではないものとして捉えられてしまうことにこの20年間における日本における状況の変化が感じられる。子どもを巡る状況や子どもに対する人々のまなざしや態度は普遍のものではなく、歴史的社会的状況にいかに左右されるかをこの論文は示しているし、これを読んだ時受ける印象が年月により変化するということもそのことを如実に物語っている。（訳者）

イタリアにおいても子どもに対する関心は、ルソー（J.J.Rousseau）による子ども期の理想化と歩を同じくする形で、18世紀に起源を持ち、19世紀の初頭には、特に、穏健な博愛主義者の間で、国民の貧困状態に関する最も一般的な論争と結びついて、より広範囲に広まる。

このような関心は、産業主義の開始により子どもにとってさらに厳しくなる過酷な窮乏状態を特徴とする生活状況を出発点とする。産業主義は女性労働者よりもずっと大きな負担を子どもに負わせる。子どもたちの状況は大衆の全体的状況からさらに気がかりなものになる。大衆は、健全な家または家に類するところで生活できず、不十分でしばしば有害な食物を摂取することで際立っている。実際、田舎の人々は通常、朝食にとうもろこしとライ麦と粟でできたパンを菜種油や亜麻仁油の入った塩水に浸して食べる。昼食は、種油かラードで味をつけ、豆と

NII-Electronic Library Service

Shukugawa Gakuin College

キャベツで増やされたトウモロコシのポレンタ[2)]少々で、時々それにチーズが一切れ加えられる。場合によって、それはポレンタとともに、夕食としても食べられる。都市の人々の食物も異なってはいない。普通彼らも、特別な出来事があるときか特別な宗教的な祭日にのみ新鮮な肉を食べる。衛生状態は良くなく、地下水や水道が下水溝によってしばしば汚染されているので、腸疾患やチフスの流行を引き起こし、それが特に子どもの数を大幅に減らすことになる。

子どもの遺棄

子どもは通常の、しかも困難な生活状況からの影響を直接受ける。その生活状況は、19世紀初頭に子捨ての実行が広まるもとになっている。その子捨てとは、施設内で子どもを養育するか、里子に預けるかの処置を講ずる捨て子養育院へ子どもを捨てることである。捨て子(エスポスティ)—捨てられた子どもはこのように呼ばれる—は、預けられた家庭に留まるか、もしそこから施設に戻されるなら、再び職人か農民の家庭に託され、そこで働けるだけ働かされる。人に知られないように子どもから解放されるために確実な方法でこのような行為（子捨て）が広がる。子どもは通常夜中にルオータ（回転式受付口）に置き去りにされる。ルオータは、寒い道端や人気がなく安全でないところに子どもを遺棄させないために据えられた。ルオータは普通窓のついた小部屋に設置される。窓の一方は道路に面して開かれ、他方は捨て子養育院の１階に位置した場所にある。捨て子養育院では捨て子を回収する任を負った人が、寝ずに見張りをする。窓の扉は日中閉ざされているのだが、夜は開けられる。罪を犯した母が罪の果実である子どもを人目につかないように連れてこられるような方法が取られているのである。

捨て子という悩みの種は、イタリア半島の中でも産業化の初期の過程がより素早く生じた地域において確実に広まり徐々に増加する。ロンバルディア州（Lombardia)、特にミラノにおける驚愕的なデータがある。そこでは、1785年から1789年の５年間において、捨て子の年平均数が790人であったが、1841年から1850年の10年間には年平均が3,300人となり、続く10年間ではついに4,384人に達している。このような現象の主な原因は、捨て子の割合と同時期の景気の変動とを比較した精密な分析により推論できるように、大衆の極端な貧困に求められる。例えばリグーリア（Liguria）のある都市に関する地方史研究の調査によると、「捨て子数の増加は麦の価格の一連の上昇とほぼ完全に一致する」とされている。同様に、捨て子数は３月から５月の３ヶ月間に増大することが分かっている。その時期には新しい作物がまだ収穫されておらず、古い作物は底をついている。また、特に女性農業労働者の相当数はリグーリアを後にして近隣の州へ出稼ぎに行くのである。しかし、新生児を捨てるという現象の根底には別の動機もある。一つには兵役義務を回避するために多くの人が若くして挙式をすることが原因となっている。また、もう一つの動機は—伝統的に子どものというものにほとんど注意を払わないという過去の心性と結びついているため、恐らくより重要なものであろうが—子どもに対するあ

NII-Electronic Library Service

Shukugawa Gakuin College

る種の「無関心」が残存していることから成り立っている。まさに後者は特に北イタリアの極貧の人々の間で、捨て子養育院を権利として、あるいは苦しい家庭の財産になんらかの負担を被ることなく、嫡出子であるわが子を育ててもらう場所とみなす考え方が広がる要因となっている。それは結局、捨て子数の増大を助長することになるのである。

救済活動の最初の介入

こういった状況において、子どもに対する「民間の慈善的行為」の最初の介入が行われた。その介入は一般的な慈愛の感情によって行われただけではなく、社会秩序を変えずに維持することに貢献したいという願望によっても行われた。19世紀前半のイタリア社会で起きたように、より一層惨めで騒然とした都市のプロレタリア階級が、その社会的安定性に危害を加える可能性もあった。しかしながらこのような事業は、それが広がる基礎となっている保守的な温情主義を超えて独自の価値を持ち、子どもにとって重要な節目になっている。促進者の中ではジュゼッペ・サッキ（Giuseppe Sacchi）が目立っている。彼は統計に関する世界年報の中で、「乳児のための特別な託児所」を確立する必要性を最初に述べている。彼はミラノの医療委員会によって行われた調査結果に言及している。その結果により、大部分の幼児の生活状況に関する非人間的な特徴が推定される。さらに彼は、他の調査によってミラノ市の出生者数の20パーセントが養育院に預けられていることが示されていると指摘している。文字通り以下のことを主張するためである。「これらの綿密な研究は、乳幼児のための特別な託児所をミラノにおいても早急に確立する必要性があるという確信を今まで以上に強固なものにした。しかし、それには以下の慎重さを伴う。すなわち、その必要性がより明白であるところにそれを設置せず、むしろたくさんの授乳中の母が集まる工場の近くに開設するということである。自分の子どもの世話をしに、すぐそばの託児所に日に何度も行くゆとりを彼女たちに与えるためである」。

最初の託児所はこのようにしてジュゼッペ・サッキとの協力に支えられ、ラウラ・ソレッラ・マンテガッツァ（Laura Sorella Mantegazza）の事業として1850年6月17日にロンバルディアの中心に開設される。サッキは新聞に情報を提供するにあたって、新しい施設の博愛的な目的を強調する。つまり、これによって慈善家集団—彼は彼らをそう呼ぶのだが—は、子どもの授乳と養育という仕事について「家の外で働く正直で貧しい母親」を助けようというのである。母親は、雇用者か、固定した雇用主がいない場合は、彼らの道徳的行為を保証する「二人の人物」から出される証明書によって労働者であるという地位を実際に立証しなければならない。

民衆の家族の多くがこのような申し出にすぐに反応し、開所から一ケ月経たないうちに託児所は40人もの子どもを受け入れることになる。その内訳は乳児18人、離乳期の子ども22人であり、彼らの母親は工場か他の職場に雇用されていた。

NII-Electronic Library Service

Shukugawa Gakuin College

これらの子の三分の一もがまず捨て子養育院に捨てられたが、その後、法律上の両親に認知され引き取られている。親はこの新しい社会的介入によって助けられていることに気付くことで促進者の主張を支持することになる。促進者は反対者の批判に応酬するために、やはりこの企画のこういった側面を公表することに注意を払うのである。この慈善施設の主な目的をジュゼッペ・サッキは次のように明確に書いている。「家族の愛情の神聖さを貧しい人々の中に常に呼び戻すことである。母親の乳房の下で新生児を保護できることのみが、いまや道徳の第一の要素である」。

しかしながら、新しい施設の反対者は達成された成果に満足しておらず（その成果はかかる費用に見合わないと考えている）、一時的な女性労働者が働かないときは子どもを家に引き留めておき、また、特に秋季には田舎に住む親戚の家に子どもを送るために、託児所は不規則な形で利用されていると強調している。

さらに、新しい施設が工員の母親に利用されていないことも強調されている。新しい施設は本来彼女たちのために誕生したのだが、彼女たちが労働時間中に工場を出て、子どもに乳をやりに行くのは難しかったのである。そして、家庭内労働者や、一時的な労働者—世論によれば、子どもを個人的に十分良く世話をすることができたはずなのだが—そのような人々の子どものみを集めることに終わるというのである。

しかし、新しい施設に対する最も厳しい批判は、イエズス会の『カトリック文化』という雑誌の誌上で公表された。そこでは、託児所を養育院と同一視して家庭の崩壊をもたらすと非難し、孤児のためにのみその開設を正当化している。

聖職者の定期刊行物はさらに、女性が母としての義務を全うすることを助けることは、家族とは無関係の雇われた者の手で義務を遂行してもらう便宜を母親にたやすく無料で提供するよりも、ずっと大きな愛の仕事であると断言している。そして、専ら「妻」として「母」としての女性を望む人々によって今日もまだ使われている主張を示しながら、次のように提案している。「むしろ、我々はこの点が非常に重要であると信じている。つまり、より少ない限られた給料をよそで手に入れることを余儀なくされて、母親が家にとどまることができないことが問題である。我々は、保育所で赤ん坊に毎日かかる費用と同額が母親に与えられるならよいと考えている。母親に彼らの子どもの養育と保護のために家にいることを説得しつつ」。

子殺しという現象

イタリア統一という出来事によっても—それは1861年に起こったのだが—子どもの状況は実質的には変わらなかった。子どもの状況改善のためにどのような型の法律も発布されていない。そこで、特に、捨て子養育院の運営に関してイタリア半島の諸都市間での相違が際立つことになる。状況は70年代頃に改善されているように思われる。その時、県の代表がルオータの閉鎖

NII-Electronic Library Service

Shukugawa Gakuin College

を通告し始め、捨て子という厄介者の排除をめざした介入促進を試みている。しかしながら、この動きは全国均一的な形では進展していない。1860年から1869年の間に193のコムーネ（市町村）がルオータを廃止し、1870年から1879年の間に256のコムーネが、1880年から1889年の間に105のコムーネがルオータを廃止している。しかし、1893年にはルオータはまだ526のコムーネで開設されたままである。事実その廃止に関する考え方は一様ではなく、それに関して様々な研究者が意見を述べている。その中では、オッタヴィオ・アンドレウッチ（Ottavio Andreucci）が目立っている。彼はそのような手段の存在が母親にとって子捨ての誘因となるのには程遠く、子殺しという現象の抑制に貢献するものと確信していた。実際、彼は—はっきりと書いているように—次のように考えている。ルオータ廃止の賛同者は、「子殺しを犯す女性の犯罪的な衝動に関して十分な理由付けをしていない。すなわち、彼らは、女性の犯罪的な衝動における強烈な恥の力を認めていない。出身階層の文化や正直で繊細な道徳的な感情が大きければ大きいほど激しくなる女性の犯罪衝動における恥の力を考慮に入れていないのであろう」。

しかしながら、アンドレウッチの分析は道徳主義に満ちた、女性についての不当な分析であり、問題の表面的な把握にとどまっている。この問題はずっと根深い社会的文化的動機を含んでいるのである。婚姻外の妊娠の責任は、実際、実質的に女性にのしかかり、女性は世論から糾弾され、時には自分の家族から捨てられる。それゆえ、自分の名誉を守りたいという願望から、うら若き少女が正真正銘の罪を犯すことになったということは十分理解できる。しかし、これらの犯罪は少なくともたいていの場合、犯罪として捉えられなかった。子殺しはまだ、現在の道徳的基準で判断されていなかったためである。事実、このような殺人罪には、しばしばかなり穏当な司法上の刑罰が下されただけでなく、公衆の非難も招かず、場合によっては単に同情心をかきたてるだけである。恐らくその同情心は、子殺しを産児調節の手段とみなすという先祖から受け継いだ遺産なのである。その例として1882年のエピソードが挙げられる。エリザベッタ・ボナンニが当事者であり、犠牲者である。12歳の時に、生まれ故郷であるアブルッツォを、そして、そこに残った家族の元を離れて、ローマで家政婦として働く21歳の貧しい少女である。エリザベッタは妊娠したが、子どもの父親が誰であるかという確信がない。つまり、現在の恋人か去年の主人の息子か。いずれにせよ、誰にも妊娠の事実を知らせない。1882年1月27日の夕刻、集まった家族に食事を供した後、エリザベッタは陣痛に襲われ、一人で部屋に戻るように許可される。—平素は他の家政婦と共有している部屋に—。そこで、彼女は夜更けに女児を出産する。生まれるとすぐ彼女は鼻と口をふさいで窒息死させ、それからトイレにもっていき、下水管に投下できるように遺体を小片にする。数日後、管理の仕事をしている職人がその犯罪に気付く。エリザベッタはすぐに尋問され、わずかに抵抗した後、罪を自白し、その後この罪に対し懲役10年の有罪判決を受ける。

殺人の残虐性は確かに現在の読者の感受性により衝撃を与えるものであるが、このエピソードは家の沈黙のみが不幸な人を助けることができると考えている主人たちの態度—それは世論

NII-Electronic Library Service

Shukugawa Gakuin College

を象徴的に代表しているのだが—に関しても意味深長であると我々は考える。主人たちは恐らく非嫡出子を殺すことは正式の結婚による子どもを葬ることよりはひどいことではないと確信しているからである。

社会的文化的秩序を守るという動機づけ—それは、いずれにせよほとんど常に金銭の問題とつながっているのだが、実際に多くの嬰児殺しの原因である。この当事者は刑法に基づいて追及されるとはいえ、明らかに慣習の力に左右され、動かされる。慣習はある世代から次の世代へと伝えられて、成文法よりもしばしば強い力を持つ。さらにこの点に関して、1820年代のボローニャ地方で犯された3件の子殺しは特徴的である。一つ目はガスパーラ・グルリーニが当事者である。彼女は出産直後に子どもを溺死させる。肉体関係をもった男性と、適当な持参金がないためにまだ結婚をしていなかったためである。子殺しの第2のケースにおいても同一の心理的社会的要因が、子殺しの基礎になっている。これは他の農村の女性が主人公である。彼女は持参金のための貯金を蓄えつつあり、彼女も正式な婚約者との結婚を待ち望んでいる。彼女は妊娠していたが自分のパートナー（婚約者）にさえもそのことを言わない。恐らく彼女のパートナーは結婚前の持参金がなくても結婚したであろうが、しかし、そうすれば彼女を新しい農家の家庭において不利な状況に導くことになったのであろう。農家では、結婚の金銭的側面が感情的側面よりも重要であるとしばしば考えられているのである。これに対して第3の子殺しの基礎となっている動機は異なる。それに関しては別の若い女性が当事者であり、犠牲者である。彼女はいとこでもある婚約者との間に設けた子どもを出産する。親族（関係）であるために、彼は彼女と結婚することができるように司教区庁の公認を一年前から待ち続けていた。この場合においても、女性は体面を失うことを恐れて自分の子どもを捨てている。子どもに対しては、生物的ではなく文化的な関係のみが認められることは明らかである。実際、こうした嬰児殺しは、女性の側が母親になることを拒否しているという意味ではない。女性たちは普通の状態で母親になることを望んでいたであろうが、むしろまさに正当な妻かつ母になるという彼女たちの未来を守り保護するために子殺しへ駆り立てられるのである。

子どもの死亡率

19世紀においては子どもの死亡率の割合は高いままである。その中でも私生児や捨て子の死亡率はより高い点に達している。しかしながら、少なくとも生後1歳までの子どもに関して、状況はイタリアのあらゆる地域で同一とは限らない。例えばサルデーニャ（Sardegna）では死亡率に関しては嫡出子と非嫡出子の間に本質的な相違はない。同じように、ラツィオ(Razio)においても違いは極めてわずかである。それに対して、ピエモンテ（Piemonte)、カンパーニャ（Campagna)、ロンバルディア、シチリア（Sicilia)、カラブリア（Carabria）では、常に非嫡出子の死亡率は非常に高く、しばしば嫡出子の二倍以上であり、ある場合には全く驚くべき

NII-Electronic Library Service

Shukugawa Gakuin College

割合の時もある。1895年ピエモンテにおいて嫡出子は100人中17人が死亡したのに対して、非嫡出子と捨て子は100人中49人が死亡した。また、カラブリアでは1883年から1885年の３年間で、死亡率はそれぞれ20パーセントと41パーセントであった。そのような現象の原因は、社会的なものであるのは明確であり、貧困と文化的遅れという状況に起因する。その現象を掘り下げた方法と十分な熟達性をもって研究した人物が以下のように記している。「二つの割合の基本的相違は恐らく生物発生的な要因によるものではなく、非嫡出子と嫡出子を区別する特別な社会的経済的条件の影響に左右されることは確かである」。

さらに「嫡出子」という最も広い範疇について、その時代の権威ある学者が記しているところによると、家族の経済的状況と子どもの死亡率との間には緊密な関係が存在しているということに気付く。実際、後者、すなわち子どもの死亡率は、富裕な人々の間よりも貧しい人々の間でずっと高くなっており、1,000人の出生者のうち５歳に達したのは、貧困層では665人、富裕層では943人であった。同様に、嫡出子と捨て子の死亡率の相違は明確である。次に掲げる表やデータを比較すれば容易に推論できるであろう」。

実際、捨て子の死亡率はかなり高い。例えば、1890年から1892年の３年間に援助を受けた乳児で１年以内に死亡した者は1,000人中370.3人であり、その割合は1893年から1894年の２年間にはより高くなり、保護を認められた乳児1,000人中389人であった。

この現象の要因は様々であり、19世紀と20世紀の最初の数10年間に、数多くの小さな犠牲者の命を奪い続ける。まず第１に、悲惨な衛生状況の継続、援助組織の欠如、妊娠期、授乳期、分娩期にも女性にのしかかる重労働の過度の責任の中に、それらの原因を特定できる。この最後の時期に、妊産婦はほとんど常に保健衛生の保証なく、しばしば自宅で生活する。したがって、それは数多くの新生児の死亡原因になる。さらに、医学、特に小児医学の遅れによってそのような状況の克服はなかなか推進されない。一方、その中で、医者はなんの責任も感じない。せいぜい、子どもの死に面しても推測される親の無関心にその責任をなすりつけるのであった。実際、親は、今日、少なくともたいていの場合はわれわれが感じるような深い苦悩を自分の子どもの死に感じない。彼らはより強い神の意思に子どもの死をゆだねており、また、余計に養うべき口数として心配するような単純で自然な経済的打算によって、子どもの価値をつまらないものにしてしまった。実際、虚弱で「生来弱かった」子どもには「労働には向いていなかった」と言われる。このように医師によって冷酷で非科学的な死亡原因が告げられるように、医師もその時代の文化に左右されるのである。そして、「たいして痛まれずに彼らの死は公的に記載される」。

他方、そのような現象の克服は矛盾した方法で行われ、19世紀最後の数10年間の特徴である子どもの再評価という文化的過程と産業化の開始といった相互依存的要因と結びつくことによって行われた。「子どもの再評価と経済発展の間の相互関係は―その点について的確に書かれてきたが―死亡率の減少がその地域の生産性上昇と直接比例して生じるという事実からも推論

NII-Electronic Library Service

Shukugawa Gakuin College

される。それに対して、そのような上昇が起こっていないところでは、幼児死亡率はまだ高いのである」。

しかし、もしそのことが本当であっても、イタリアの産業化—それは大衆とりわけ都市の大衆とその子どもの生活状況を徐々に改善していったのだが—は、児童労働という別の現象の広がりをもたらしたのは明らかである。そして、それは様々な状況において子どもの状況を悪化させることになった。19世紀の終わりの段階において、子どもを工場で雇用せざるをえない非人道的な生活状況を非難する進歩的な研究者や政治家の立場の表明が数多くなされた。1879年アルベルト・エレーラは、モンツァ市の紡績工場で「夜遅くまで」「幼稚園に通う方がよいような幼子」が働いており、いくつかの地域では時には、腕で支える糸巻き機の労働に幼い子どもが就いていたのを見たと書いている。そして、かなりの年月を経た1898年、モッツォーニ(Anna Maria Mozzoni)—彼女はイタリア最初のフェミニズムの代表者であるが—は、次のことを発見したと主張した。—政府の調査でロンバルディア地方を旅したとき—、冬の間、全ての農民家庭で仕事がなく、「もっぱら、糸巻き作業で子どもが家に持ち帰った12、15、20チェンテージモ[3)]によって手に入れたポレンタだけで」生活せざるをえなかった。これらの工場では、さらに、「わずか4歳の子どもでさえ、工場の厳しい規律に青ざめ、打ち沈み、途方にくれ、死ぬほど疲れ、24時間中12時間から14、15時間もの間、注意深く、静かにいつも同じ場所に立っている」と彼女は明言した。

それでも産業化と大衆の暮らしの向上によって子どもの状況は実質的に改善された。イタリアの20世紀最初の15年間を特徴づける一般的な進歩的動向を利用することができたのである。しかし、子どもの解放の過程は、イタリアでも長い時間をかけて、多かれ少なかれ矛盾した反応の中で発展していった。新しい世紀の最初の10数年に改良主義者、社会主義者が関心を示して以降、ファシズムのたぶんに方便としての注目が続くことになる。それはこの社会的カテゴリーのための介入の救済的および温情主義的特徴を強調するものであり、1946年に生まれた共和国の新しい段階になっても政策で維持されることになった。結局、子どもに対する敬意が具体化されるのは、文化と慣習がより広範に刷新される流れの中であり、我々の時代、70年代になってからである。新しい法律上の選択をすることによって—それは、社会の成熟した感情の原因であり、結果であるのだが—、イタリア社会で、子どものもつ重要性と重みを認めることになる。

NII-Electronic Library Service

Shukugawa Gakuin College

注

1）Enzo Catarsi ; L'infanzia italiana nell'Ottocento, in *Vita dell'infanzia,* Rivista mensile dell'Opera Nazionale Montessori, anno XXXIII、N.4, Dicembre, 1984.

2）トウモロコシの粉に水を混ぜ、火にかけて練り上げた食べ物。

3）貨幣の単位。

NII-Electronic Library Service